
義妹とメイドと魔法 ～消えたおっぱいの行方～

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義妹とメイドと魔法　く消えたおっぱいの行方く

【Nコード】

N9508G

【作者名】

zens

【あらすじ】

ある朝、メイドの叫び声に目覚めると、おっぱいが無くなったと騒ぐメイドがいた。犯人は一体どこに？義妹とメイドと医者を送る魔法と探究心による単純コメディです。

王立魔術院を卒業し、医師として働き始めて早1年。

難関資格の1つである国家魔術師という肩書も功を奏し、私こと、ユート・レスタンテの治癒院は繁盛していた。

おかげで私は忙しい日々を送っていた。

家にはメイドのセシリアと、今年から魔術院に通う義妹のアンナ・レスタンテと共に暮らしている。

異世界からやって来て、あれほど嫌っていた親の職業である医者になるというのは皮肉なことだ。

元の名前は、白羽 悠斗（しらはね ゆうと）。この世界から帰るのを諦めた日、捨てた名前である。

春のうららの休日のある朝。

「きゃああああああっ」

メイドの絶叫と共に俺は目が覚めた。

クールな俺は、私という一人称を好むが、プライベートは俺になる。セシリアは、まだ若いが非常に働いてくれる良いメイドだ。気立が良いので患者さんに人気もある。

彼女が叫び声をあげるとは本当に珍しい事で、Gが現れたときでさえ叫び声1つあげないのだ。

これは一大事に違いない、と俺は一目散に彼女の部屋へと走った。

「ど、どうした!？」

ノックもせずに部屋の扉をあけると、セシリアはパジャマのボタンを外して自分の胸を覗き込んでいた。

そして、俺を見ると真っ青になって乱れた服のまま泣きついてきた。

「わ、私の自慢のおっぱいが……ないんです！」

「はあ？」

これが事件の始まりだった。

「……73。うわーんっ、私、もう生きていきませんっ」

「だから、サイズを測るのはやめた方がいいと言ったのに。はい、ティッシュ」

俺は、泣き崩れたメイドを見て呆れ返っていた。

こうなることは予想できたのに、何故するのかと。

今、俺とセシリアはリビングにいる。

この状況でセシリアが料理を作ることなど無理なので、俺が代わりに簡単なものを作った。

「な、何から何まで本当にすみません。……でも、どうしてこんなことに」

胸がないくらいでそこまでがっかりしなくてもいいと思うのだがどうだろう。

セシリア並みに胸がないと生きていけないなら、大抵の人は生きていけない。

「本当に自慢だったんですよ。形も良く、柔らかいので揉みごたえも良いはずなんです」

「はあ……」

俺としては、患者で裸は見慣れているのでどうということもない。そのはずなのだが……。

「いえ、いつかは、私もユート様に揉んでいただくはずだったのですが」

「ぶーーーーーっ」

セシリアの言葉に口に含んでいた水を思いっきり吹いてしまった。彼女も俺が急に吹いてむせ返っているのを見て、慌ててこちらへやって来る。

「あ、ああっ。い、今、拭きます」

「どうして、俺がセシリアの胸を揉まないといけないんだ？」

すると、セシリアはさも当然と言わんばかりに今はない胸を張って言った。

「田舎で聞きました。メイドは主人にあんなことやこんなことをされる」と

「……それ、全部間違ってるから。で、言った奴は誰だ？ 特別にただで治療してやる」

「ゆ、ユート様、怖いです……」

医師は、そういった人々も治療しないといけないよな。いずれ治療してやろう。俺は、今日の事を頭の中に大事にしまった。

朝食の片づけは、だいぶ落ち着いたセシリアがやってくれることになったので、俺は義妹でも起こしに行くことにした。

休日とはいえ、ぐうたらと過ごすのはよくない。

学生は少しでも勉学に励まなくてはいけない。優秀な魔法使いを目指すなら尚のことだ。

禁欲によつて魔法使いになることはできない。ある教授から教わった話である。

部屋の前に着くと、

「んっ……あ……ふうつ。これ、結構重たいな」

アンナの部屋から声が漏れてきていた。

ふむ、朝からお盛んなことで。

が、少し気になるのも事実だ。どういう風になっているとか。

べ、別にこれは医学的な興味であつて、スケベ心からじゃないんだからね。

自分への言い訳も終えて、俺はそつと部屋の中を覗いた。

アンナはちょうど前がこちらを向いているので、寝巻、こちらで言うところのYシャツは上から下までボタンが外されおり大きな胸が露わになっているのが見えた。

ちなみにアンナは下は履かない派らしい。

それはいいとして随分と立派に育ったものだ。つい数日前までツルペタだった……。

「……ん？ 大きな？」

自分の言った言葉に疑問を持ってしまふのは、職業柄言葉には気を付けているからだ。

薬の名前や病名など間違えたらいけないことはたくさんある。

その前にそろそろ戻るか。さすがにここで出会ったら気まずいはずだ。

しかし、聡明な私は気付いてしまった。さっきまで聞こえていたはずの艶声が聞こえなくなっていることに。

「あ……兄貴」

ふむ、義妹に気づかれてしまったようだ。

ここは、家族として当然の挨拶で切りぬけるしかない。

俺は何事もなかったかのように、アンナの部屋へ入り電気をつけると、嫌になるくらいの営業スマイルで言った。

「おはよう。ところで、アンナって、そんなに胸あったか？」

「おはよう……って、どうして私の裸を見て、淡々としているんですっ」

「妹の裸に欲情する奴がいたら変態だろうに。それに俺は医者だ。裸なんて腐るほど見てる」

最近、不能なんじゃないかと思うこともあるくらいに、俺は紳士なのだ。

しかし、この家に淑女は残念なことにはいない。

代わりにいるのは、やや戦闘民族のメイドと悪戯好きの義妹だけだ。

そんな戦闘民族のセシリアに見つかったら……と思ったら、彼女は既に隣に立ち、まじまじとアンナの胸を見つめていた。

「あつ、それ、私のです。返してくださいっ。右胸に3つ並んだほくろがありますからっ」

「いたっ。ご、ごめんって。ちょっと羨ましかっただけなんだからねっ。これがあれば、ユートを誘惑できるなんてこれっぽちも思っ
てなんていないんだからっ」

「いいから、早く返してあげてくれ」

結局おっぱいを盗んだのは義妹だった。

何でも、大きい胸というのに興味があつて魔法で盗んだのだという。
ただ、あまりにくだらないうのと、素直に返したということでの件
は不問とすることになった。

そして、翌日。

俺は朝から尿意を妙に覚え、トイレへと駆け込んだ。

そして、用を足そうとしたのだ。

「げっ」

俺は思わず声をあげた。まったく朝から面倒なことだ。

『あれ』の向いている方向が悪くて足にかかってしまった。

とりあえず、位置を修正しようと手を伸ばす。

しかし、あるべき場所に『それ』はなかった。つるっつるだ。そこ
で俺は気がついた。

「あーーーーーっ」

義妹はまったく反省などしていなかったのだ。昔からそういう奴だ

ったことを、ここ数年一緒にいなかったのですっかり忘れていた。
用を足し終えた、俺はリビングへと駆け込んだ。
俺は怒りに身を任せ、叫んだ。

「アンナ、お前……って……」

が、リビングでは異様な光景が繰り広げられていた。

「きゃあっ！？　で、でも、すごい」

「どうよ、この兄貴の『これ』は」

アンナがセシリアに見せていた、裸丫シャツの裾からはみ出た『それ』はまさしく俺のマイサン。

つまり、この義妹が俺の『あれ』を盗んで、自分に生やしたのだ。

俺は力の限りアンナに向かって叫んだ。

「俺の（ピー）を返せっ」

そして、不躰にもこちらを向いていた息子の頭を横からなぎ払うように引っ叩いてやった。

「わお」

が、俺の『あれ』はピンといきりたつと、怒りを込めて自身を大きく見せ、こちらを威嚇するだけだった。

このクソ息子が。

俺はもう一度手を振り上げると今度はありったけの力を込めて、大きくなった『あれ』を引っ叩いた。

さすがに2度の折檻には耐えかねたようで、息子はしゅんとうなだ

れた。

「私が怒らないうちに早く返せ、な？」

「……はい」

こうして2日続けて起きた泥棒騒ぎは幕を閉じたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9508g/>

義妹とメイドと魔法 ～消えたおっぱいの行方～

2011年5月6日08時07分発行